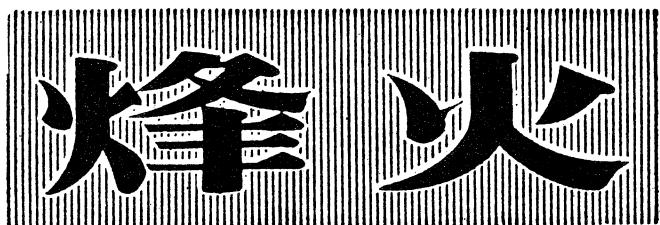


☆帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉碎し、世界革命戦争—世界プロ独を組織する世界単一党を国際階級闘争の最前線に組織せよ！

1979年
2月10日
第321号
編集発行人 高木一夫
一部 150円



共産主義者同盟（全国委員会）

■ 大阪戦旗社 大阪市大淀区本庄東2丁目2の31
とみやビル15号 (電) (06) 371-3706
■ 東 京 新宿北郵便局 私書箱 2018号
■ 沖縄 那覇東郵便局 私書箱 2016号

侵略反革命戦争・ファシズム準備と対決し、春期闘争の中から

武装せる革命の伝導路を組織せよ



狹山再審勝利に6000が決起（1月26日・日比谷）

開始された79年の全世界的激動

七三年石油危機をマルクマールにした世界資本主義の危機は、この七九年、破局的段階にいたる兆候をますます鮮明にしている。昨十二月、O E C D（経済協力開発機構）が発表した加盟二四ヶ国の七九年G N P伸び率は、七八年の三・五%から三%へとさらに落ちこむことが予想されている。それは、各国情の現状を見る時よ

全国の同志諸君！たたかう労働者人民諸君！
開始された現下の七九年国際階級闘争の激動は、「資本主義の最高発展段階としての帝国主義が、社会帝国主義の巨大な育成を与件として延命をとげる時代、そして、その内部から世界プロレタリア独裁への移行の条件が成熟をとげていく時代」という現代過渡期世界の世界史的性格をいよいよ鮮明にしている。戦後ヤルタ・ジユネーブ体制の崩壊局面の内部から、七八年を数倍りわまわる規模で、革命的危機への移行の諸条件が成熟をとげつつあるものとして、こんにちの情勢はとらえられねばならない。

3・25三里塚全国総決起闘争へ！
元号法制化阻止！七九春闘勝利！

1979年2月10日

烽火

り深刻である。米帝カーターの八〇年会計年度予算教書（一月二二日）は、「インフレの克服」を理由に、前年度比実質〇・七%の歳出規模増と、超緊縮予算を提起した。大規模な公共投資とインフレ政策によってなされた米帝の「不況対策」は全面的破綻を宣告されている。日帝もまた、七八年度において、前年度比二〇%増の膨張予算をくみ、公共投資拡大・金融緩和等あらゆる手をつくして、かわらず、不況からの脱出はなしえず、七九年度においては、一九三五年前後に匹敵する四〇%にのぼる国債依存の圧力のために、不況の累進化を余儀なくされている。

現下の不況局面は、戦後資本主義の成長それ自身が生みだした危機、資本主義が資本主義であるかぎり埋めあわせることのできない生産の無政府性が生みだした過剰生産と恐慌への転移、この兆候のますますもっての顕在化にほかならないことがあきらかになつてゐる。この世界資本主義の危機は、ソ連帝にあつても帝国主義のそれと照應し、七六年から始まつた第十次五ヶ年計画がはやくも絶望的になつたように、全面的な生産の停滞・低成長期にはいつてゐる。各国帝は、労働者へのすさまじいまでの合理化攻撃、失業と低賃金労働の強要をもつて、生産規模の縮少、「減量経営」にふみだしている。だがそれは、国内市場の狭隘化をまねき、需給のギャップを拡大し、一層の生産の縮少を余儀なくされるといふ循環のなかにある。この出口のない危険からの突破の道は、領土・資源・市場をめぐつての、世界の政治的・経済的再分割戦以外にありえない。しかし、こんにちの帝国主義は、かつての第一次・第二次帝国主義戦争の時代とは明確にことなつて、民族解放・社会主義勢力の包囲・解体・封殺をもつてしか、市場再分割のための帝国主義戦争につきすむことはできない。したがつて世界資本主義の危機がプロレタリアートに意味するものは、国際階級闘争の鎮圧を焦点とした帝と社帝の世界支配再編の策動と侵略反革命戦争への動員、これにある。

現下の米帝とソ連社帝を中心とした世界支配再編の策動は、戦後ヤルタ・ジュネーブ体制の崩壊によつて失われた均衡を自己のものにまきかえし、あるいは一元的に掌握せんとするものである。それは、世界資本主義の危機からの死活的延命方向であるがゆえに、ますます熾烈の度を加え、すべての帝国主義国、社会帝国主義国をまきこんだ対立と抗争として展開されている。

米帝カーターは八〇年会計年度予算教書のなかで、超緊縮予算と、全体方向に反して三%にのぼる軍事費増を提案し、「協調・平和の世界の基盤作り」（七九年一般教書）の意味するものを鮮明にした。「三%の増額分は、大部分NATO軍の強化と米ソ戦略バランスの維持に注ぎこまれている」（予算教書）

と言明するように、その焦点は次の点にある。

第一に、SALT IIの妥結をみこしたMX米次期大陸間弾道弾全面開発、空中発射巡航ミサイルの実戦化、生物・化学兵器・レーザー砲などの「核」以降の新兵器の開発である。

そして第二に、「NATO加盟国は国防費をもう五ヶ年毎年実質三%増額させる」（七年五月NATO首脳会談）をうけたNATO軍の強化である。欧州大陸で有事のさいに、

十日間以内に陸軍五個師団・空軍五〇飛行中隊の派遣をなす体制への移行を焦点に、NATOの即戦体制は再編強化されつつある。そ

して第三に、「北東アジア、中東、ペルシヤ湾岸の潜在的に不安定で、戦略的に重要な地域」を焦点にした侵略反革命体制の再編強化である。イランをはじめとした反帝民族解放闘争の激発は、帝国主義の世界戦略をゆるがし、世界資本主義の危機を倍加させ、帝国主義を深刻な危機意識にたたきこんでいる。一

月六・七日に、米・西欧帝の政治戦略の検討を軸におこなわれたグアドループ・米・英・仏・西独四ヶ国首脳会議は、欧州における対ソ連軍事力の強化とともに、「イランなど第三世界を中心にして発生している国際危機は、西側工業国に深刻な打撃を与える問題になつて」ことを誓約しあつた。それは、昨年の米大統領秘密指令一八号にあきらかなように、アフリカ・中東を焦点におしすすめている。

他方、ソ連社帝は、コメコンーウルシャワ条約機構の体制的強化をおしすすめ、中国にたいする包囲・封殺を頂点に、民族解放闘争の成果を自國の経済的・軍事的利益のもとに従属させるための介入の策動を、とりわけ、アフリカ・中東を焦点におしすすめている。

「国際社会主義運動の排外主義的反革命的制圧、國際共産主義運動の強化」を名目にして、この帝・社帝の世界支配再編策動は、そのもとに労働者人民のたたかいを解体・歪曲し、動員すべく、次の二つの鮮明な政治焦点をもつてつらぬかれている。

それはまず、戦後ヤルタ・ジュネーブ体制崩壊の主體的要因をなした民族解放・社会主義勢力にたいする包囲・封殺・解体の攻撃である。帝国主義の侵略反革命は、戦後一貫して帝・社帝の連合にささえられ、民族解放・社会主義勢力の破壊に焦点をあてた戦争遂行体制であった。それはいま、日中平和条約締結・米中国交樹立・ソ連ベトナム友好協力をもつて、アジアを中心化している。

第一に、アラブ・アフリカ・南米における反帝民族解放闘争の巨大な胎動である。とり

わけイランは、戒厳令をぶち破り、犠牲を恐れず英雄的にうちつづく数百万の労働者人民の決起に搖れてゐる。イラン人民が当面の打倒対象とするバーレビ国王体制こそ、五三年MCAによって擁立された新植民地主義支配体制であつた。そのもとで、イランの石油生産を、メジャーラが構成するイラン石油サービス会社が一手に握り、また米帝は、イランに最新鋭戦闘機F14をはじめ過去五年間に二〇〇億ドルの軍事援助をつぎこみ、ソ連社帝の南侵に対抗する「ペルシヤ湾の憲兵」という戦略的要衝としてきた。それゆえ「バーレビ国王体制打倒！」をかけたイラン人民の決起は、その基礎において激しい反帝闘争である。このイランの激動に対し、自己の世界

支配の野望のうちにとりこもうとする米帝・ソ連社帝の策動がすでに開始されており、それは帝国主義の支配はいよいよばず、社帝の支配のもとも被抑圧民族の政治的・経済的解放はありえないことを日々あきらかにしている。まさにこんにちの反帝民族解放闘争

は不可避に社帝との闘争に直面せざるをえず、社帝との闘争をめぐる民族解放・社会主義勢力内部の路線闘争を、全世界の階級闘争の結

烽火

合と前進の焦点として浮かびあがらせていく
注目すべき第二は、一月八日ベトナムに支
援されたカンボジア救国民族統一戦線による
プロンペン制圧と、中国・ベトナムを両軸と
する民族解放―社会主義勢力内部の対立・路
線闘争の激化、それへの帝・社帝の介入とい
う「事態」である。

るのは、「一平和五原則」によつては決して解決しえない一国革命のもつ民族的限界の対立である。それは、世界党指導にもとづく世界

る。社会主義は、全世界的にしか実現されることはない。権力を掌握したプロレタリアーとその党は、世界革命の實現にむけ、自己の一国権力を世界プロ独の一構成部分へと、党を世界党の一部へと改組するたたかいをしないぬかなければならぬ。この革命的実践的見地にたつもののみが、国際階級闘争—国際党派闘争の激化を、革命的危機への移行の主体的要因として発展させることができる」と。

一片のくもりもなく証明している。そうだ！
すべての諸君！ われわれの任務は、この革
命的実践的見地をふまえ、こんにちの情勢を
革命の準備期へと転化することにある。帝国
主義が危機の反革命突破をかけて、帝国主義
戦争とファシズムにうつたえるときこそ、革
命的情勢が最大限に煮つまつたその時である。
われわれはそれを全国一斉のプロレタリア武
装蜂起の時とすべく、こんにちから革命的情
勢への一步一歩の移行とむすびつけて、武装
蜂起—プロ独の計画的系統的準備を実現しな
ければならない。そうすることもって、「
帝国主義戦争を内戦へと転化せよ！」といふ
レーニン「内戦テーマ」は、現代過渡期世界
を生き、たたかう革命的プロレタリアートの
鮮明な政治戦略となるのである。

な帝国主義間市場再分割戦にかちぬくことを可能とする国力と国家体制の建設をめざす戦争であり、人民を排外主義のもとに暴力的に統合せんとするものである。

こうした日帝の野望はカンボジアをめぐる激動の中にしつかりとつらぬかれ、さらに具体化されようとしている。日帝はブノンベン「陥落」の翌日、ただちに「ASEAN諸国と同一歩調をとる」と宣言した。そして「東南アジアの平和と安全」を名目に、動搖するASEAN諸国の買弁支配階級にたいして、タイへの四六〇億円（七九年度分）をはじめやつぎばやに援助強化を決定し、ASEANへの政治的・軍事的盟主としての新植民地主義支配の強化をもくろんでいる。そして他方においてベトナムへの援助を事実上停止し、ソ連社帝と対峙しつつ、民族解放－社会主義勢力の変質解体をねらい、もってアジア朝鮮への侵略反革命の強化をすすめんとしたのである。

この戦争準備の策動は日韓体制の再編強化と結合した八〇年安保攻撃を統合的な焦点としている。われわれは全力をあげて八〇年安保攻撃との対決を組織し、日帝の侵略反革命の新たな段階と全面的に対決する日本階級闘争の前進をきりひらかなければならぬ。

争をスター・リン主義に対する根本的批判と結合してたたかえず、世界プロ独立世界党建設をめぐる国際党派闘争として組織しえないという限界として把握しなければならない。それは「自主独立・内政不干涉・兄弟党間の平等」などという世界党建設を指定しえない一国党的立場にとどまつてゐることに鮮明である。その実践的結果は、こんにち第一に、不斷に「一国社会主義論」に傾斜し、生産力主義に屈服せざるをえない国内階級闘争指導の不徹底性に、第二に、「三つの世界論」にもとづく反社帝反霸権統一戦線の戦略的誤りとむすびついて、安保承認・NATO承認等、帝国主義心臓部において帝・社帝の結合した攻撃とたたかう先進的プロレタリアートや反帝民族解放闘争との結合を不可能にしてゐる。

すべての労働者人民諸君！七九年初頭の国際階級闘争の激動は、全世界のプロレタリアートの眼前に、現代過渡期世界の革命的止揚の課題を鮮明に提起している。この時、革命的プロレタリアートの任務はなにか。烽火三二〇号においてわれわれは次のように提起した。「帝国主義下階級闘争をたたかうプロレタリアートと民族解放－社会主義をたたかうプロレタリアートの单一の國際主義的團結の要は、自國革命を世界プロ独立へと変革しつづけるための世界党建設をめぐる國際党派闘争の徹底遂行であり、これに規準づけた帝国主義下革命運動とプロ独立下階級闘争の結合であ

田帝=大平新体

日帝は、世界資本主義の危機に基礎からゆさぶられている。帝と帝、帝と社帝の世界再分割戦の激化、反帝民族解放闘争、自国内人民の反抗と憤激の増大は、その危機を政治的にも経済的にも倍加している。日帝は、昨秋有事立法攻撃を頂点に戦後かつてない規模と激しさで侵略反革命戦争とそのもとへの国民総動員体制の確立へと突き進んだ。それは現下の危機からの唯一の死活的延命方向ゆえに福田→大平のブルジョア政権交代劇をへて一層巧妙かつ熾烈に遂行されんとしている。

日本階級闘争がいよいよ真正面にすえたたかうべき、自国帝国主義によつて準備される戦争の基本的性格をわれわれは次のようにおさえなければならぬ。

的・軍事的支配権を確立、護持し、これを踏み台に東アジア全域を自己の新植民地主義的権益圏として征覇するための戦争として、第二は、アジア・朝鮮の民族解放・社会主義勢力をはじめとして、反帝民族解放闘争をたたかう党と人民諸勢力にたいする公然たる

反革命の争奪として

こうした日帝の野望はカンボジアをめぐる激動の中にしつかりとつらぬかれ、さらに具體化されようとしている。日帝は「ノンバン」「陥落」の翌日、ただちに「ASEAN諸国」と同一歩調をとる」と宣言した。そして「東南アジアの平和と安全」を名目に、動搖するASEAN諸国の資本支配階級にたいして、タイへの四六〇億円（七九年度分）をはじめやつぎばやに援助強化を決定し、ASEANへの政治的・軍事的盟主としての新植民地主義支配の強化をもくろんでいる。そして他方においてベトナムへの援助を事実上停止し、ソ連社帝と対峙しつつ、民族解放・社会主義勢力の変質解体をねらい、もってアジア朝鮮への侵略反革命の強化をすすめんとしたのである。

この戦争準備の策動は日韓体制の再編強化と結合した八〇年安保攻撃を統合的な焦点としている。われわれは全力をあげて八〇年安保攻撃との対決を組織し、日帝の侵略反革命の新たな段階と全面的に対決する日本階級闘争の前進をきりひらかなければならぬ。

八〇年安保攻撃の特徴は次の点にある。

第一に、日米安保体制に占める日帝の独自の位置の飛躍的強化である。第二に、日米共同作戦体制の飛躍的強化である。昨十一月二十五日、日米防衛協力小委による「日米共同対処行動指針（ガイドライン）」決定は、日米共同作戦体制がすでに「朝鮮有事」に即応しうる臨戦体制に突入したことを中心としている。そして他方「第二次朝鮮戦争」を想定したチームスピリット⁷⁸をはじめ実際上の日米合同軍事演習の新たな展開。とりわけ朝鮮侵略反革命戦争の直接出撃拠点＝沖縄は、在沖米軍のあいづぐ実弾砲撃演習、昨秋の自衛隊の統合訓練、さらに軍事燃料備蓄計画・石油政策の要＝CTS建設など日米帝の集中的な攻撃をあびせられていく。第三に、帝国主義軍隊＝自衛隊の即戦性、実践性に焦点をあてた強化である。有事立法や「新三矢作戦研究」はその頂点をなすものである。くわえて七年は「有事」にそくした自衛隊中枢機構の整備を、統合幕僚会議の強化、陸海空の統合的元的指揮機能＝「中央指揮所」の新設をもつて飛躍的に強化し、国連軍への参加規定を明文化せんとする防衛二法改悪を、今国会上程をひかえて焦点におしあげていい。まさに「核武装」「海外派兵」「治安出動」をなする自衛隊への強化の結節環として八〇年安保攻撃は存在している。

1979年2月10日

てゐる南朝鮮は、日帝にとつて政治的・軍事的・経済的生命線である。それは現在、「日韓定期国防閣僚会議」新設など日韓軍事体制の確立にむかひ、他方第四次経済開発計画への全面的介入によつて韓国軍需産業の掌握の段階にいたつてゐる。これは韓國労働者人民にたいする極限的なまでの強収奪強搾取と民族的抑圧をもつて貫徹されてゐる。うちつづく学生決起、また東一紡績女子労働者の決起など全国的に不屈にたたかわれてゐる反朴闘争は、同時に激しい反日（帝）闘争である。

日帝はこの攻撃を福田→大平というブルジョア政権交代をもつてすすめんとしている。その意味するものはない。「先人がやつてくれた国民的合意をふまえ尊重し、はざれることのないようカジとりをしたい」（大平12／8）と明してゐるよう、侵略反革命戦争とそれへの国民総動員体制の確立を第一級の政治課題とする点において福田となんらかわるところはない。そのうえで大平の登場をもつて日帝が強化せんとする攻撃は次の点にある。

第一。昨秋、日本階級闘争は社帝の「護憲平和運動」に不斷に収約されるという限界をもちつつも有事立法粉碎闘争を頂点に、戦争とファシズムをめぐる労働者人民の巨大な憤激と活性化を生みだした。「部分連合論者」を自認する大平は、「福田とは手法がちがう」「権力に頼る政治はダメだ」と「中間連合政府の現実性」をありまくことをもつて社帝をより深く日帝のふところにだきこみ、労働者人民を改良の幻惑のもとに組織せんとしていることである。

第二に、「経済の時代から、文化・精神の時代」をとなえ「君ヶ代、国旗を大切にするのは当然」「教育勅語の中身はよいもの」（内藤文相）と、天皇制（イデオロギー）を中心とした排外主義イデオロギーによる国民統合を強化せんとしていることである。深まる日本資本主義の危機のもとで人民を「戦争」へと組織する排外主義イデオロギーの強化は日帝にとって不可欠の課題にはかならない。社帝はこの日帝→大平の攻撃に「大平の登場は福田路線（タカ派的姿勢）の敗北」「有事立法反対のたたかいが屈折したものではあれ自民党内に反映したもの」「日本の政治の新しい要素」（日共）と全面的にとりこまれ、社帝としての反革命的役割を純化させてゐる。かかるもとに、日帝→大平は二～三月元号法制化攻撃を全面的にうちおろしてゐる。二月国会工程がもくろまれてゐる元号法案は次のようにものである。「第一条元号は政令で定める。第二条元号は皇位の継承があつた場合に限りあらためる。付則二この法律施行のさい、現にもちいられてゐる『昭和』はこの法律に基づき定められた元号とする」靖国神社法案、「君ヶ代」国歌化等の突破口をなす元号法制化攻撃は、七五年海洋博一皇

太子沖縄上陸、同九・三〇天皇訪米、七六年十一・一〇天皇五〇年式典をひきつぐ天皇制（イデオロギー）攻撃の全面強化である。それは有事立法攻撃とむすびつき、帝・社帝の統合環として、天皇制（イデオロギー）攻撃はますます決定的な位置をもつてゐる。社帝・右翼日和見主義は「慣習としての元号の使用には反対しない」と元号法制化攻撃の反革命的性格をおおいかくし、「一世一元制は主権在民の憲法の精神にそぐわない」と天皇制（イデオロギー）攻撃との闘争を「護憲運動」へと歪曲せんとしている。これらの部分を粉碎し、二～三月の政治攻防の焦点へと元号法制化攻撃粉碎闘争をおしひろげなければならぬ。

警察・官僚・軍隊||国家暴力装置の排外主義的統合・強化の支柱として、また民間右翼反革命の育成、人民の排外主義イデオロギーへの統合環として、天皇制（イデオロギー）攻撃はますます決定的な位置をもつてゐる。社帝・右翼日和見主義は「慣習としての元号の使用には反対しない」と元号法制化攻撃の反革命的性格をおおいかくし、「一世一元制は主権在民の憲法の精神にそぐわない」と天皇制（イデオロギー）攻撃との闘争を「護憲運動」へと歪曲せんとしている。これらの部分を粉碎し、二～三月の政治攻防の焦点へと元号法制化攻撃粉碎闘争をおしひろげなければならぬ。

新たな転機に立

つ日本労働運動

以上のような性格をもつて登場した日帝||大平新体制のもとで、労働者階級はどのように攻撃にさらされるのであらうか。

こんにちブルジョアジーは高度経済成長の神話によってはもはや、不可避に増大する労働者人民の不満と反抗を、一時的にせよ吸合することができないことを知つてゐる。「七八%経済成長による景気回復」をかけた福田にかわつて政権の座についた大平は、一月二十五日の施政方針演説の冒頭「急速な経済の成長のもたらした都市化や近代合理主義に基づく物質文明自体が限界にきた」と、その全面破産をみとめざるをえなかつた。こうして大平は「日本型福祉社会の建設」なる新たなマヌーバーを標榜して登場してきたのであるが、それは一定の改良の約束ですらなく、労働者人民にとつてはよりいつそりの貧困と生活苦勞働苦の強制のみを意味するものである。なぜならば「日本型福祉社会の建設」の柱をなすものは、一般消費税導入をはじめとする増税・高負担政策と「産業構造の転換」という名の金融寡頭体制強化の政策であり、いづれにせよ、労働者人民にたいする徹底した搾取と收奪の強化であることはかわりはないからである。

七年石油危機を歴史的起点とした一大不況はついに六年目に突入した。資本主義の内在的矛盾は尖鋭化し、日本資本主義の屋台骨はグラグラに揺れ、国内経済は慢性的停滯状況をつづけている。日帝||大平はこの日本資本主義の危機の根底性を熟知するがゆえに、日帝||大平新政権のもとで、資本の労働者階級への攻撃は日々し烈化している。「安定成長・減量経営」をおおして資本の首切り合理化攻撃は、ここ数年のあいだ驚くべき規模と速度で進行してゐる。公共企業体と民間企業をとわず、資本の大小をとわず、文字どおりすべての工場職場ではたらく労働者の頭上にそれはおそいかつてゐる。造船・鉄鋼を中心とした近年にない大量解雇計画のあいづぐ発表、国鉄・郵便・電々など公営企業における大合理化計画の推進、中小での倒産・賃金カット・暴力的解雇として吹きあれる資本の攻撃は、政府公表統計ですら一九五九年來最高の完全失業率を記録し、実数三百四百万の労働者を失業においやつてゐる。

事態の特徴のひとつは、全産業諸部門をつらぬく首切り合理化攻撃の頂点に、造船・鉄鋼など日本資本主義の基幹産業部門における大巾人員整理が存在し、いわばこれが呼び水となつてゐることである。われわれはここに資本主義の危機の深刻さ、長期にわたつてそれを継続するであろうこと、ブルジョアジーとプロレタリアートの階級対立はますます不可避に増大してゆくであろうことをみてとることができる。さらにふたつめの特徴は、首切り合理化攻撃の最初の犠牲者にリストアップされるのは一般に、社外工・パート・日雇などの不安定な雇用条件下におかれた中高齢者・女性・身体障害をもつ労働者層である点である。これをとおしてブルジョアジーは労働者間の競争と対立と反目をあたりたて、さらには歴史的社會的に形成されてきた性差別・民族差別・部落差別・「障害者」差別などをも動員して、労働者内部への差別分断のくさびをよりいつそり強力にうちこもうとしている。第三の特徴は、首切り合理化が職場支配の強化・組合つぶし・活動家ペーシングをともなつて、労働運動への介入・反革命的再編の策動と一体的に推進されるといふ性格が、ますます顕著になつてきてゐることにある。沖電機による明確にレッドバージの性格をもつた二八〇名にのぼる指名解雇、南大阪における戦闘的組合破壊と歩調をそろえた破産倒産の諸攻撃、あるいは全通解体、全郵政育成をねらつての郵政マル生などはその代表的なものである。

そしてこれらの攻撃の一貫した協力者・先兵として労働者階級の前にたちあらわれるものこそ、社共・民同・同盟JCをはじめとした社会帝国主義である。帝国主義は新植民地主義支配にもとづく超過利潤の一部をもつて

十七名全員に有罪

反動判決を弾劾する

共產主義者同盟 (全國委)

11·19北大阪武装制圧闘争 沖繩「返還」協定批准阻止 被告団

さる一月二十九日、大阪地裁は
七一年十一・一九沖縄「返還」協
定批准阻止をたたかいた十七
名のすべての戦士でをへして、二

年六ヶ月（執行猶予三年）を最高にした有罪判決をうちおろした。われわれは、これを徹底的に弾劾しなければならない。

判決文において、まず批判されるべき点は、「背景・動機」についてである。公判闘争の最大の論点は十一・一九闘争が検事の主張するような「機動隊への暴行を唯一の目的としたもの」ではなく、すぐれて沖縄「返還」協定粉碎という政治的立場にもとづく政治闘争であるということであった。判決は、この点について「……その動機・目的はともかく、社会に不安を与える、許すべからざる犯罪」とのべ、検事の主張を、われわれの追求の前に直接には適用しえなかつたとはいえ、根本において検事の主張に実質上屈服するものである。第二に批判される

べき点は「この種の集団による事件については、その集団内部の指導的位置との関係で量刑を決定すべきである」と公然と組織破壊攻撃を宣言していることである。

判決文において、われわれの主張がもちろん全面的に貫徹され得るわけではないが、われわれは、ここにちの組織破防法攻撃と、司法の反動化のなかで、実刑攻撃をうちくだきえたことを基本的に勝利であると考える。かかる公判闘争の勝利を実現したところの、十一・一九沖縄「返還」協定粉砕闘争の意義は以下の点である。

第一に沖縄「返還」協定を日帝の侵略反革命の直接的のりだしととらえ、これとの闘争を呼びかけた民族解放―社会主義勢力との連帯をめざして、沖縄侵略反革命前線基地強化粉碎を内実に、十一・一九闘争はたたかいぬかれたことである。七一年より七年の歳月をへ沖縄の侵略反革命前線基地は、飛躍的に強化された。沖縄「返還

な政治的正当 第二には、が七一年當時背景にして、ロレタリアー装の強化を領してたたかいプロレタリア自然成長にゆき義者とはことじむけた、党してわれわれ和見主義は、「戦争路線」のトの武装闘殺する赤報派て、われわれにせんとした第三には、二・一八路線以降の、党建装闘争のもつの一十一・一九にせんとした力戦であつた

性であった。この十一・一九闘争の武装闘争の高揚と人民の党による武装蜂起にむけた導することを目的ぬかれたことであつた。人民の武装をだねる右翼日和見となり、蜂起一プロレタリアの目的意識的領導はとらえる。右翼論外にしても「革命」とでプロレタリア争をテロ戦のみになどの部分にたいへんは党の戦闘団を中心とした闘争をつうじて鮮撃戦としての街頭決定的重要性を、設のための最初のことである。政治のである。

争な黨員を建設するのである。七一年沖縄止闘争の八年は七年有余の中央集権非合法主導で、たがたを止めてではない。この日と六日と展させられると内戦に転化されわれわれは意である。長きにわたりと支援を感謝

党建設をになり強
改ることに結果し
純「返還」協定批准
公判におけるたたか
の苦闘のなかで勝利
たたかいは終了したわ
このたたかへの教訓
日本法党建設の教訓へ
れ、日帝の侵略反革
化するたたかへと
なければならない。
はその最先頭にたつ
る公判闘争への結
論いたします。

殺人行政=市更相を糾弾（12・30）



金ヶ崎善房治安強田をうややく死」を許さんぞ！仕事よこせ、病氣の仲間を入院させろ！この合言葉とともに開始された第九回金ヶ崎越冬闘争は、昨十二月二十五日から二月二八日にいたるたかにいのまつただなかにある。われわれは「越冬をたたかう会」を組織し、釜石労や支援の労働者・学生とともに、一月八日までの限られた期間ではあったが、断固として越冬闘争支援活動を貫徹した。

の一ヶ月間で越冬室の焼きたてを受けていた人のべ八二八五名、青カン者数のべ六二七三名、救急車の呼びだし計六八台、医療券発行のべ二七七人。毎日二六〇人の人が炊きだしなしには食事を取ることができず、二〇〇人がドヤにも泊まらず寒風に身をさらしている。そのなかに、資本主義によつてもつとも苛酷な重労働を強いられ、ただひとつの生きる手段である肉体をボロボロにされ、仕事のとだえる年末年始には死との苛酷なたたかいで強いられる釜ヶ崎労働者

の現実がある。釜ヶ崎解放会館を拠点に毎日おこなった日に三度の炊きだし、医療券の配布、医療バトロール、医療センター前の宿泊施設づくり、それらはいずれも地道な活動だが、釜ヶ崎労働者の肉体と生命を防衛する重要なたたかいなのだ。

しかし、この「防衛戦」にとどまつていてはならない。労働者を完全な無権利におとしめている資本・行政・警察権力とたたかいつを打倒する反撃戦の隊伍をうちか

烽少

察の七一年当時の弾圧はすさまじく、交番への強制拉致・事務所周辺での連日のテロ・集中的なガサ入れの攻撃をかいくぐって十一・一九闘争は実現された

社会帝国主義を育成し、これを労働者階級内部の要所に配置し、労働運動の排外主義的制圧と組織化をもつて、戦争と「アシズム」にむけた産業報国会化の攻撃を強化しつつある。帝国主義の意をうけた社会帝国主義は、資本主義の未曽有の危機を革命的危機に転化させてゆく革命的プロレタリアートのたたかいで、全面敵対し、労働者階級を資本主義の危機救済の沼地へとひきすりこまんとしている。社帝は、耐えがたいまでに増大する労働者人民の貧苦の現実を逆手にとって「雇用確保・生活防衛」のぎまん的スローガンをかかげる。そしてその現実が、資本主義の再建と中間連合政府の樹立のもとでの制度保障の確立についてのみ可能であるとするデマを流布している。しかしどのような美辞麗句で粉飾をこらそうとも、これはブルジョアジーにたいして新植民地主義支配とブルジョア独裁の強化、すなわちプロレタリアートをしばりあげる鉄の鎖をもつと重くすることを要求することにはかならない。不況と合理化の嵐が吹きすぎふこんにちの情況下で、同盟JCは、資本の大巾人員削減計画を全面的にうけいれ（鉄鋼・労連）、軍備増強・兵器国産化要求を運動方針にもりこみ（造船重機労連）、また民同右派幹部は労働戦線統一問題を軸に同盟JCへの合流をうたいあげ（全電通など）、総じて日帝・大平のもとでの産業構造の全面的再編と、労働運動の排外主義的制圧の強力なない手として社会帝国主義者は台頭してきているのである。

こうして、本年七九春闘攻防は日本労働運動にとり、歴史的なせめぎあいに発展するのでは避けられない。本質上七九春闘をめぐる階級攻防の焦点は、敵陣営・帝・社帝が産業報国会化攻撃によつて労働者階級を制圧統合し資本主義延命のための一大橋頭堡をつくりだすこととに成功をおさめるか、それとも革命党にひきいられた革命的プロレタリアートが帝・社帝の政治攻撃をうちやぶつて武装蜂起・プロレタリア独裁の一里塚を構築するのかに存在している。このように攻防の基準を鮮明にひききることを否定する右翼日和見主

社会帝国主義を育成し、これを労働者階級内部の要所に配置し、労働運動の排外主義的制圧と組織化をもつて、戦争と「アシズム」にむけた産業報国会化の攻撃を強化しつつある。帝国主義の意をうけた社会帝国主義は、資本主義の未曽有の危機を革命的危機に転化させてゆく革命的プロレタリアートのたたかいで、全面敵対し、労働者階級を資本主義の危機救済の沼地へとひきすりこまんとしている。社帝は、耐えがたいまでに増大する労働者人民の貧苦の現実を逆手にとって「雇用確保・生活防衛」のぎまん的スローガンをかかげる。そしてその現実が、資本主義の再建と中間連合政府の樹立のもとでの制度保障の確立についてのみ可能であるとするデマを流布している。しかしどのような美辞麗句で粉飾をこらそうとも、これはブルジョアジーにたいして新植民地主義支配とブルジョア独裁の強化、すなわちプロレタリアートをしばりあげる鉄の鎖をもつと重くすることを要求することにはかならない。不況と合理化の嵐が吹きすぎふこんにちの情況下で、同盟JCは、資本の大巾人員削減計画を全面的にうけいれ（鉄鋼・労連）、軍備増強・兵器国産化要求を運動方針にもりこみ（造船重機労連）、また民同右派幹部は労働戦線統一問題を軸に同盟JCへの合流をうたいあげ（全電通など）、総じて日帝・大平のもとでの産業構造の全面的再編と、労働運動の排外主義的制圧の強力なない手として社会帝国主義者は台頭してきているのである。

今春期当面する

党建設上の任務

リアートは、労働者階級の憤激を資本主義救済へと吸合せんとする帝・社帝の策動とたたかい、労働者階級の奥深くに革命とかたくむ現すべきときである。そして革命的プロレタ

ーの反撃を組織しなければならない。七九春闘・雇用確保・生活水準維持なる経済主義的わくぐみをうち破り、社帝支配下の労働運動の内部から革命的政治的決起をいまこそ実現すべきときである。そして革命的プロレタ

資本主義の危機深化に抗し 釜ヶ崎二万の反撃を

第九回 釜ヶ崎越冬鬪争 | 中間報告

ゆる憤激の細流を、労働者人民の決起をおしつぶし資本主義の救済の沼地へとひきいれんとする社会帝国主義とたたかへ、権力奪取をめざす单一の階級闘争へと組織すること、こ

団結もつつき大会には六百の労働者が三角公園に集まつた



の警備体制をしき、大阪市当局は二四時間たたかいの拠点となる公園を封鎖し、南港の宿泊所に機動隊とガードマンを配置し、たたかいの圧殺をもくろんだ。

十二月二五日の白手帳規制抗議闘争、十二月二九日、三〇日の南港宿泊所受けつけに集まつた労働者へのビラ入れを機動隊の弾圧をうなぎやぶつて貫徹し、たたかいの序幕はきつて落とされた。そして二月四日、釜日労を先頭とする釜ヶ崎労働者、支援百名が対大阪市差別殺人行政糾弾闘争に決起した。無残に殺されていく仲間、そしてそれを他人ごとに決してできなかい釜ヶ崎労働者の現実を知りつくしている労働者の圧倒的な糾弾の嵐の前に、市当局と警察権力は市役所前においても南港宿泊所においても機動隊の力でもって門前ばらいをくわせようとし、南港にお

いては釜日労委員長稻垣氏と釜崎労働者一名を不当にも逮捕しるという暴挙にうつてでた。だ弾圧の強化は、ただたかいで、に油をそそぐだけだといふこと、権力は思い知らなければならぬ越冬闘争は、二万釜ヶ崎労働者総力で、以前に倍する熱意でも貫徹されている。

すべての諸君！釜ヶ崎のたたひは、七五年テント村決戦より一年をへて、釜日労の建設をとおして新たな前進の胎動を生みだしつある。そして、そのことによて釜ヶ崎のたたかいは「釜ヶ崎開放」を誰とともに、どのような路線のもとに実現するのかといふ問題にふたたび鋭くつきあたる局で

れを実現するとのできる革新的組織を建設すること、ここに核心的問題が存在する。

日本帝国主義の延命の中心環は、侵略反革命戦争とファシズムの準備とたたかい、基幹・中小・未組織をつらぬいて「プロレタリアート全体の統合された活動全体」（レーニン）の創出にいまこそ全力を傾ける時である。

運動＝労働組合的立場を大経済闘争を分の決起を組合封じこめ、同封じこめ、「共发展せん」とアートのた曲する一部右争は不可欠で

れを実現するとのできる革命的組織を建設すること、ここに核心的問題が存在する。

日本帝国主義の延命の中心環は、侵略反革命戦争とファシズムの準備とたたかい、基幹・中小・未組織をつらぬいて「プロレタリアート全体の統合された活動全体」（レーニン）の創出にいまこそ全力を傾ける時である。

釜ヶ崎労働者の決起を日本階級闘争総体の前進と結合し、釜ヶ崎の部分性・個別性をプロレタリアートの革命運動へと止揚・統合しうる革命的政治闘争の組織化が、釜ヶ崎階級闘争の発展に参加するわれわれとすべての先進的釜ヶ崎労働者に要求されている。「労働

の決起を組合封じこめ、同についても「共發展せんとアートのた曲する一部右争は不可欠でわれわれはから稻垣氏を援交流集会を果をいつたんひきつづく第援と釜ヶ崎メとともに団結があつた。ひともに決起せ

經濟闘争を分運動＝労働組義的立場を大

運動＝労働組合運動」なる経済主義の立場を大前提に、政治闘争との決起を組合運動（経済闘争）に封じこめ、同時に組合運動自身についても「共産主義の学校」へと発展せんとする革命的プロレタリアートのたたかいに敵対し、歪曲する一部右翼日和見主義との闘争は不可欠である。

われわれは一月二一日、釜日労から稻垣氏をまねき、越冬闘争支援交流集会をもち、たたかいで成果をいつたん収約するとともに、ひきつづく第九回越冬闘争への支援と釜ヶ崎メーデー、夏祭りなどをともに団結したたかうことを誓つた。ひきつづくたたかいで、ともに決起せん！

片平闘争が勝利したのは、「障害者」の団結を大切にし、「障害者」解放運動と労働運動との階級的結合とその強化を追求し、被差別部落大衆との階級的連帯共闘の成果です。日和見主義、社会排外主義党派の敵対・妨害との首尾一貫した闘争なしには「勝利」はなく、公判闘争の維持さえ困難だつたと思ひます。

攻撃など、反動と侵略戦争に向かって人民支配を強めています。この厳しい情勢と、差別・分断・隔離・抹殺の「障害者」支配の強化にあって、私たちの公判闘争は、反証闘争にはいります。

私たちには、支援戦線の強化・拡大をもつて反証闘争を勝利的に闘い抜き、完全無罪・労働権奪還・差別弾圧、「障害者」解放運動の大をもつて反証闘争を勝利的に闘い抜き、完全無罪・労働権奪還・

差別の元凶、差別を生産する資本主義、自国帝国主義打倒に向けてこれからも闘いを続けていくことを決意するものです。

資料集・Ⅱは、「府は私を雇え・・・！」とあわせて読んで下さい多くのみなさんの感想・意見・批評をお願いします。

日本帝国主義は、排外主義・差別思想の煽動を激化させ、七九養護学校義務化攻撃、刑法改悪・保安処分新設攻撃、七七年赤堀政夫さんへの「精神障害者」差別による第四次再審棄却攻撃、弁護人抜き裁判法、元号法制化、有事立法

前進をめざして、下記「資料集・
II」を発行しました。これからも
片平闘争が闘つてきた地平を守り
継承・発展させ、「障害者」解放
運動を階級闘争としてしつかり位
置づけ、大衆路線で公判闘争の勝
利をめざして闘いぬきます。また

校長団交・糾弾闘争から五年を
むかえた日――

3・25現地闘争への決起を訴える

三里塚はふたたび正念場を
迎えようと/orします

三皇地政局總務處房地圖冊

港建設が農民おいだし、農民殺しのなにものでもない大企業による抑圧であることもあきらかになつてきています。しかしけれわれがいかに正当性を主張しようともこの空港を廃港においてまないかぎり、これはわれわれが敗者になるということあります。

一九七九年三月二十五日、三里塚芝山連合空港反対同盟はこの日を記念の日として総決起集会の開催を決定いたしました。本反帝戦線全国委員会の機関紙をつうじて、すべての読者にさらなる廃港へむけての要請をおこなうとともに、現地集会への総力をあげた結集をうつたえる次第であります。

労農学の力 で3—25を

昨一九七八年三・二五(二六)
の労農学の共同のたたかいでよ
つて国家的威信をかけた年度内
開港はみごとに粉碎されました

九七七年、今年こそは廃港の年へ、労農学の勝利を！といふ方針をうちだしたわけです。運輸省空港公団は六四〇億にのぼる莫大な予算を準備しました。その予算をもつて年度内にはB・C滑走路をふくめて、なんとしても工事着工をしなければなら

ないといふ状況に公団はおいで
まれております。まさに廃港か
二期工事を許すのか、ふたたび
三里塚北総台地は正念場にたた
されているとわれわれは見てい
るわけです。

昨年の五・二〇強行開港以来
われわれがたたかってきました十余
年間の正当性といふものは明らか
になつてあります。北総台地二〇万、
四万戸の人たちからとら運輸省や空港公団の説明にだ
まされた、こんなはずではなか
つた、この騒音を私の耳からと
りさつてくれ、飛行機を止め
くれ、こういふ手紙や電話が反
対同盟の事務局にひつきりなし
に寄せられております。そ

三里塚がかかってきた十三年
間のたたかいのなかには、国際
情勢の問題やまた安保の問題、
三里塚がひきだしたすべての権
力側の裏側がさらけだされてお
ります。成田新立法や有事立法
をふりかざして、日本の大企業
が生きのびるための戦争の道へ
と突入すべく、ふたたび軍靴の
足音がアジア侵略にむけられよ
うとしていることを、われわれ
は見ぬかなければならぬと思
つております。

三里塚の国際空港といふもの
はけつして桃色のペールにつつ
まれたそのようなものではない

片平鬪争資料集・II

- 冒頭意見陳述 ■更新弁論
■起訴状 ■人権委員会への申し入れ書など

B5判 500円

発売中

プロレタリア国際主義の今日的基準とは

階級闘争の巨大な転換期が訪れていた。戦後マルタ・ジュネーブ体制崩壊へといたる国

期世界の革命的突破に直面していくことをしめした。

昨年末以降、事態はさらに急速度にすすみ一定の逢着点をむかえつつある。そして、日本帝国主義心臓部プロレタリアートは、これを新たな国際主義的団結の形成へと対象化しなければならない。

本論文においては、帝国主義―社会帝国主義の結合した階級闘争の排外主義的組織化―中間連合政府攻撃のもとでの、右翼日和見主義の小ブルジョア民族主義の全面開花を粉碎しプロレタリア国際主義の旗色を、現下の党派闘争の中に鮮明にしてゆくこととする。

右翼日和見主義の小ブルジョア民族
主義を紛碎し、民族解放―社会主義
勢力との新たな国際主義的団結を！

あくまでも軍事空港であるといふことを終始一貫うつたえつづけてきましたけれども、現時占にたつた時に、それが正しかつたといふことが明らかになつております。たとえば現在の一番ゲートから出入りしているU.S.アーミー、軍事郵便の貨物郵便車が、夜陰にまぎれて軍事郵便物を送りこみ、また軍事郵便物をつんで東京基地方面に運送しているといふ事実が発覚しております。

われの手に
北総合地は寒い嚴冬をこえつ
つあります。いま二期工事着工
阻止、農業振興策粉碎、成田用
水関連事業拒否、このようなス
ローガンをかかげて農地を絶体
に守りとおすといふ二期工区内
十七戸を中心とした、新たな決
起がもりあがりつつあります。
三里塚は全国の住民闘争のま
さしく天王山であります。また
ここでたたかってきている労働
者のみなさんも、三里塚空港を
廃港においこむたたかいをもつ
ることにおいて、労働者の解放の
真のたたかいがあるだろう、そ
のようない偉大なすばらしいたた
かいとして、とりくまれてゐる
と思います。

反対同盟は三・二五全国総決
起集会をもつて新たな戦力と新
たな拡大組織を、三里塚に結集
して廃港においこむたたかいを
展開していく決意であります。
全国のみなさまに、ここに三・
二五の全国集会の呼びかけをし
みなさんとともに三里塚空港廃
港へ！すべての勝利をわれわれ
の手へ！このスローガンをかか

北原鉱二

ことにおいて、労働者の解放の真のたたかいがあるだろう、そ
ごてたたかくぬいていきたくと
思ひます。

うことを終始一貫うつたえつづけてきましたけれども、現時点にたった時に、それが正しかったということが明らかになつております。たとえば現在の一番ゲートから出入りしてへるU.S.S.

北総合地は寒い厳冬をこえつ
つあります。いま二期工事着工
阻止、農業振興策粉碎、成田用
水関連事業拒否、このようなス
ロー・ガンをかかげて農地を絶体
起集会をもつて新たな戦力と新
反対同盟は三・二五全国総決
眞のたたかいがあるだろう、そ
のよきな偉大なすばらしいたた
かいでして、とりくまれていて
と思います。

思ひます。

ターリン主義の立場の全面的発露によつて「大祖国防衛戦争」のもとに封殺し世界プロレタリア独裁への移行の根本的要をたたき折り、世界党の解散一否定をもつて帝国主義戦争への全世界的なプロレタリアートの敗北へといたるのか。それとも帝国主義心臓部における階級闘争との歴史的結合をもつて、世界革命戦争—世界プロレタリア独裁という社会主義への全世界的移行の長大な出発点を形成する好機となすのか。これが、プロレタリア国際主義の今日的規準の第一である

第二は、民族解放—社会主義勢力の前進と結合する帝国主義心臓部階級闘争のゆいいつの道が、帝国主義戦争を内戦に転化する目的意識的な革命闘争の推進にのみにゆだねられ

階級闘争のけん引力であつた民族解放—社会主義勢力が、そのきりひらいた地平ゆえの歴史的限界に厳しく直面している。問題はこうである。

卷之三

社会主義の団結を！

シヨア民族

港廃
われ
かか

力との結合と、うる革命的実践の見地からおりこえてゆく重要なたたかいであるということについてである。

「…この抑圧（他民族の抑圧）は、資本主義の没落を人為的に遅らせ、世界を支配していする帝国主義的諸民族の日和見主義と社会排外主義を人為的に支持する療薬の一つである」（『自決に関する討論』）侵略反革命の再編強化と結合した階級闘争の排外主義的組織化Ⅱ中間連合政府攻撃こそは、姿をかえた戦争と革命の時代における抑圧民族の民族主義の重心である。

被抑圧民族にたいする抑圧と収奪の基盤のうえに、帝国主義と社会帝国主義の結合した労働運動支配が、今日的には労働運動の産業報国会化へと目的意識的にすすめられんとしている。

われわれは、プロレタリア独裁をめぐる國際党派闘争を労働運動内部における敵との闘争と結合させ、帝国主義労働運動－産業報国会化攻撃とのたたかいを鮮明にしてゆかねばならない。

そうだ。われわれはこうしなければならない。

われわれは、プロレタリアートのまさにどの部分が社会排外主義者と日和見主義者のうしろについており、また今後もついてゆくかを、われわれは一まだれにしても一予測することはできない。闘争だけがこれを示すであろう。社会主義革命だけがこれを最後的に決定するであろう。しかし、われわれが確実に知っていることは、帝国主義戦争における『祖国擁護論者』が少数者をしか代表していないことである。だから、われわれがひきつづき社会主義者でありたければ、もとと下層に、もつと深く眞の大衆のところにはいってゆくことが、われわれの義務である。これこそ、日和見主義との闘争の全意義であり、この闘争の全内容である。われわれは、日和見主義者と社会排外主義者が実際に大衆の利益を裏切り、売りわたしていること、彼らが労働者の少数者の一時的な利益を守っていること、彼らがブルジョア思想やブルジョア的影響の伝達者であること、彼らが実際にブルジョアの同盟者であり手先であることを暴露しそうすることによって大衆に彼らの政治的利益を見わけること、帝国主義戦争と帝国主義的休戦とのあらゆる長い、苦痛に満ちた転変をつうじて、社会主義のために革命のためにたたかうことを教える」（『帝国主義と社会主義の分裂』）

産業報国会とのたたかいを『戦争とファシズム』にたいするプロレタリアートの自然発生的流動のなかから、プロレタリアートの革命的自覚と革命的決意を育てあげ、プロレタ

リアートをたすけて革命的行動にうつらせ、革命的危機に応ずる組織をつくりだすための大戦場へと転化しなければならない。

民族解放—社会主義

昨年末の一連の事態、すなわちソ連－ベトナム友好協力条約の締結、米中国交樹立、カンボジアにおける「新政権」の樹立、ひきつづく中国における文化大革命批判の新たな局面は、民族解放－社会主義勢力の直面する歴史的限界を加速度的に表面化させた。それはアジアをめぐる帝国主義と社会帝国主義の世界支配再編策動の激化、民族解放－社会主義勢力内部の路線的対立の深まり、を基底的因素として進行した。

まずわれわれはこの生起した「四つの事態」を総括的に把握しておこう。

第一の事態。昨年十一月初旬、ベトナムはソ連とのあいだに友好協力条約をむすんだ。それは昨年六月におけるコメコン（ソ連・東欧を中心とした経済協力機構である経済相互援助会議）への正式加盟、十月コメコンによる対ベトナム援助の決定という経済関係から、前記条約第六条「双方は両国の利益に影響するすべての重要な国際問題について相互に協議する。一方が攻撃あるいは、攻撃の威かくの対象となつた場合は双方はその脅威を除き、平和と安全を保障する効果的な措置をとる目的をすみやかに相互協議を開始する」にみられるよう軍事面での協力へとその範囲をおしひろげていることにその特徴がある。

それは日帝によるアジア新植民地主義支配－侵略反革命の再編強化にたいする対峙を形成すると同時に、カンボジア、中国にたいする軍事的対峙を形成することを目的としたものである。この友好条約にさいしてベトナム共産党は、①「社会主義建設と祖国防衛の事業におけるわが人民の力量をいつそう強化し、東南アジア情勢の安定に貢献するものである」とした上で②「ソ連との連帯はつねに、わが党と国家の原則性をもつ基本政策である」③「社会主義共同体の力をさらに強固にするうえでの貢献である」のくだりにみられるように、一線を画しつつもソ連共産党を「社会帝国主義」としてとらえることのできない限界ゆえに、ソ連＝社会帝国主義の世界支配再編策動のアジアでの根拠を与えるをえないものである。

共同声明の骨子は「(1)七九年一月一日付で外交関係樹立。(2)米国は中華人民共和国を唯一の合法的政府と認める。(3)七二年の上海コ

ミニケの原則を再確認し国際的武力衝突の危険をへらし、霸權を求めず、霸權を樹立しようとする努力に反対する。(3)台湾は中国の一部であること。(4)米中正常化はアジアと世界和平に貢献する」とされている。

中国共産党にとってそれは七二年米中会談によつてしめた基本方向、すなわち民族解放－社会主義勢力の前進のうえにたつた帝国主義にたいする「息つき」であり、台湾の解放をめざすものであり、ヤルタ・ジュネーブ体制崩壊後の、社会帝国主義による世界支配再編策動に対抗せんとする方向をひきつぐものとして、その位置をまずとらえておかねばならない。しかしながら、もはやそれのみではないのである。それは「近代化された社会主義強國の建設」にもとづいた「反霸權外交」として体系统化されているのである。

このような体系统化は、帝国主義による國際党派闘争にたいする介入とたかううえで、ソ連社会帝国主義とたかううえでの、決定的弱点をいつきよに噴出しつつある。それは民族解放闘争にたいする指導力の急速な後退をもたらしているのである。

第三の事態。本年一月初旬におけるカンボジア救国民族統一戦線による首都アノンベン制圧、人民共和国樹立の一挙的な進行である。この電撃的ともいえる事態の進行を規定したのは、ベトナムによる対カンボジア国境紛争の早期終結にむけた動向である。しかし同時にこれが、いわばポル・ポト政権の瓦壊といふ要素を一方でははらんでいることを見のがすことはできないのである。それは積年わたくつて伏在してきたベトナム共産党とカンボジア共産党の路線的対立として、その顕在化としてベトナム－カンボジア対立が進行してきたことを裏づけるものでもある。

第四の事態。昨年十一月以降の中国での壁新聞における「毛澤東批判」をもつて、「四人組追放」以降に進展してきた文化大革命批判が新たな局面をむかえたことである。それは「四人組」批判以降の文化大革命批判が、その中ソ論争による國際共産主義運動の大分裂のなかにおける位置を明確にしえず、かつまたその「プロ独立の階級闘争」指導上の総括としてなしえずに、きわめて一国的な見地から、しかも「民主主義の制限」からの批判として展開されてきた限界そのものの一定の外化であり、帰結にほかならない。

以上の四つの事態はわれわれが、民族解放－社会主義勢力との新たな国際主義的団結を実現するうえでの、決定的な試金石である。

右翼日和見主義の小花

ブル民族主義の開花

烽火

この時にあたって、右翼日和見主義は自己の「小ブルジョア民族主義」を全面開花させ、民族解放一社会主義勢力の歴史的限界を固定化し、その歴史的到達地平を解体せんとつとめているのである。

カンボジアにおける新政権の樹立にさいして、革マルは「中ソの代理戦争」であるといい放った。そして四トロは「中ソの合同計画による團結、インドシナ社会主義連邦万才」と主張した。それはまったく異なったかたちであらわれていようとも、反スターロツキズムの「小ブルジョア民族主義的本性」があらわれにほかならない。なぜならば民族解放闘争を「自決権」一般に封殺する社会帝国主義に屈服し、前者はその社会主義への前進の萌芽を否定し、抑圧民族のブルジョア民族主義の擁護者としてたちあらわれる。後者は「民族の完全な同権」こそが実現すべき社会主義の内実であると、あからさまに主張することによつてである。

なによりも「小ブルジョア民族主義」は、国際主義とはたんに諸民族の同権を承認することにつきると言明して民族的利己心をそのまま温存している」「民族植民地問題に関するテーゼ」)のだ。そして、この小ブルジョア民族主義とのたたかいは「プロレタリアーントの独裁を一国的な独裁から国際的な独裁に転化させる任務が緊急になればなるほど、ますます重要になつてくる」(同)といふことなのである。

右翼日和見主義の「小ブルジョア民族主義」としての路線本性は、第一に連邦主義としての世界プロ独(单一共和制)の否定とあらわれれる。

その第二は、社会帝国主義党との国際党派闘争をつうじた世界單一党への抑圧民族、被抑圧民族プロレタリアートの完全な組織的な統一を、左翼反対派の民族の連合党をもつて否定することにある。

その小ブルジョア民族主義の路線本性の第三は、内戦スローガンの否定を「祖国敗北」の一般的承認=反戦闘争、反戦平和内閣の希求にまで転落させ、帝国主義戦争の時代における階級対立の非和解的激化、最大限の階級闘争の組織化としてのプロレタリア独裁への転化を否定するのだ。

民族解放一社会主義勢力の逢着点の突破はすぐれて帝国主義下階級闘争との、新たな国際主義的団結の形成に存している。したがつて、右翼日和見主義の「小ブルジョア民族主義」を粉碎して、日本プロレタリアートの世界プロ独、世界党建設の旗のもとへの結集を戦取ることこそ急務である。このたたかいの前進の中から、民族解放一社会主義勢力の社会主义への前進のための歴史的限界を、現代過渡期世界の革命的突破という単一的基軸のもとにのりこえてゆくことができる。

そのためこそわれわれは、プロレタリア

国際主義をめぐる原則的視点を次に簡単に提示しておることとする。

右翼日和見主義による世界プロレタリア独裁の否定。四トロの「中ソ合同計画経済、インドシナ連邦万才」は、あきらかに連邦主義にほかならない。

「連邦制は諸民族の労働者の完全な統一にむかう過渡的な形態である」(『テーゼ』)といふレーニン主義の見地は、世界党の世界プロレタリア独裁を統一共和制として組織するたたかいのもとでのみ、被抑圧民族国家におけるプロ独下の階級闘争の前進と結合する時にのみ「過渡的形態」であつて、四トロのごとくかかる前提を否定した連邦制の主張は、抑圧民族の民族主義的ギマンである。

連邦主義の根本は、階級の廃止への過渡期がプロレタリアーントの全世界的収奪をもつてしかおわりようのない、全世界的な階級闘争の一時代であることの否定である。

そして成立した一国におけるプロ独国家が民族国家としてしかはじまりえず、それはこのプロ独下の階級闘争を、世界革命へと指導する世界党の階級闘争指導をもつてのみ、世界プロレタリア独裁へと自己を変革しつづけることができる。

われわれは過渡期の全時期にわたつて、ブルジョア民族国家の廃絶にむけてたたかいつけなければならぬし、世界プロ独を統一共和制として組織するたたかいをつらじてのみ、ブルジョア民族国家の廃絶へと最後的につきすすむことが可能であるのだ。

次の点は、右翼日和見主義による世界單一党の否定である。

コミニンテルン二回大会規約は次のようになっている。「共産主義インターナショナルは勝利を促進するためには、資本主義を一掃して共産主義をつくりださんとしてたたかう労働者協会は、高度に集中されていなければならぬことを承認する。共産主義インターナショナルは、事実においても行動のうえでも全世界の單一な党でなければならない。異なつた諸国で活動する党はその個別的な支部にすぎない。共産主義インターナショナルの組織機関は、各国の労働者にたいして必要な時はいつでも、他の組織されたプロレタリアーントからの能うかぎりの支援をうけられる機会を保障すべきである」

四トロの「全世界に新しい共産党を!」なるものは、このレーニン主義に敵対し、①プロレタリア独裁をめぐる国際党派闘争を否定し、②蜂起=プロレタリア独裁を組織する中央集権合法党として帝国主義下のプロレタリア党を建設しなければならないことを否定し、③そしてそれを世界党の一部へと改組してゆかねばならないことを否定する左翼反対派の連合党、小ブルジョア民族主義の党なのだ。

最後に、右翼日和見主義による「戦争とファシズム」への屈服についてである。それは内戦スローガンの全面否定である。

四トロはこういふ。「こうして、かつて第一次世界大戦を通して明らかになった第二イントーナシヨナルの祖国防衛主義、民族排外主義が革命的祖国敗北主義かの激烈な分岐ができる。アーナンダの権力奪取の最大限の自然発生的条件の煮つまりの時であるがゆえに強調される。それはブルジョアジーにたいする階級戦争をもつてしか、帝国主義戦争を終らせることができないことを否定し、しかも侵略反革命暴力一国家暴力機構の打倒のたたかいを否定するための、小ブルジョア民族主義的なペテンにほかならないのだ。

これらのこととは右翼日和見主義者が、すべてを民族自決といふ点からみていることと無縁ではない。一国におけるプロ独国家の防衛は、たんに自己の民族国家としての利益擁護に解消されはならず、プロレタリア独裁下の階級闘争の前進、その世界革命への指導の窓口からのみプロ独期の民族問題をもたらす。これに反して右翼日和見主義者は、民族自決の対立が除去されうるといふ小ブルジョア民族主義のペテンをもつて、民族国家利益の反動的擁護者として、プロ独期において自己を全面外化させるのである。

そうであるがゆえに右翼日和見主義は、中間連合政府攻撃へと屈服し、侵略反革命戦争とファシズムへの道を掃き清めんとするのである。

現代過渡期世界、この階級闘争が戦後ヤルタ・ジユネープ体制へといつたんの封殺をよぎなくされながらも、これを突破して前進をとげてきた民族解放一社会主義勢力、スターリニズムの社会帝国主義への転化を完成させたソ連共産党二〇回大会による國際共産主義運動の反革命的排外主義的制圧を突破して、大分裂を組織してきた民族解放一社会主義勢力、それはこんにち、帝・社帝の結合した攻撃=侵略反革命戦争とファシズムの準備攻撃のまえに、社会主義への前進の苦闘に直面しているのだ。

帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉碎し、世界革命戦争=世界プロ独を組織する世界党を國際階級闘争の最前線に組織せよ!このたたかいが、ますます切迫性をもつて全世界プロレタリアートの任務として提示されているのである。